

# No.15 たにかしらっ子だより

令和4年8月9日(火)  
金丸恵美子

一寸の虫にも五分の魂…

「トンボの背中に仏様が乗ってる」「だから殺してはいけない。逃がして！」先日のドキュメンテーションにこの子ども達のエピソードが上がっていました。担任曰く、昨年の今頃に話した盆前のトンボの言い伝えを覚えての行動が、うれしかったとのこと。

「園長、見てでっかいクモ！」ドヤ顔で教えに来る子ども達は、悪い虫を見つけたから殺さんといかんような言い方で訴えてきます。「日本に、毒グモはいないから大丈夫！」「クモは、家の中のハエやゴキブリを食べてくれる良い虫」といつも答える私。子どもの頃クモを見つけるたびに、私の父の口癖をそのまま伝えていきます。検索するとその通り！クモは益虫なんですね。父は正しかったです。

この前は、4歳児(ゆり組)数名が、セミを虫かごに7匹入れて自慢げに見せに来ました。内3匹はひっくり返って死んでいました。「セミは何日生きるか知ってる？」と聞くとこれがまた自慢げに「知ってる、しちにち」「幼虫は何年も土の中いるんだって」、「だったらやっとセミになって出てきたのに、捕まえられたらどんな気持ち？」「悲しい…」そしたら「逃がそうよ！」と声を揃えセミを放ってくれました。

子どもは、生き物に対して残酷です。優しく扱うことができずに、死なせてしまいます。時にはわざと羽をちぎったり踏みつぶすこともあります。何千何万の虫や生き物が、子ども達の手にかかりその小さな命を落としていきます。当園の庭では、年中見受けられる光景です。「虫をおもちゃにしている」とご意見をいただいたことも有ります。確かに捕まえるだけで、死なせてしまうことも大半です。虫を飼育して生態を観察したり、透明ケースに入れいろいろな角度から虫の動きを観察したり、図鑑で調べたり。その教育的意義は計り知れませんが、残酷に見えても虫を死なせてしまう(あるいは故意に殺す)ことは、子ども達にとって通らなければならない過程だと思えます。そしてそれらの行為をあえて黙認することも私達の配慮と考えています。

子ども時代に経験する虫取りをただの虫取りやおもちゃにしないために、昔からの言い伝えを子ども達に伝えたり、捕まえて観察したら自然に放すことの意義を知らせることも私達大人の役割です。

難しいかもしれませんが、機会を見て『一寸の虫にも五分の魂』の言葉を使って、生き物の命の戒めを語って見ようと考えています。

お盆がきますね…

『盆と正月』の言葉があるように、日本人にとって1年間の節目に来る、盆と正月は特別なものです。どちらも宗教的ないわれがありますね。特にお盆は、ご先祖の供養やその年に亡くなった方の新盆を迎えることとなります。ご家庭で、それぞれの過ごし方や習わしがあることでしょう。13日のお墓に亡くなった方を迎えに行く迎え盆や15日にお墓に送る、送り盆などを経験させて欲しいなと思います。また、仏前に線香をあげたり、そうめんなどの供物を運ぶ手伝いも喜んですることでしょう。終戦と重なるお盆の期間は、物悲しいけれど、**家族で過ごす、盆の思い出を子ども達の心の中に残して欲しいと思います。**

私ごとですが…

先週の土曜日、田んぼの草取りをしました。朝の7時前から50代後半の私達と義妹夫婦。その子どもの19歳と21歳の男子。83歳の義母の計5人。ぬかるみに足をとられながら雑草を抜いていきます。実は、この作業、義母がひとりで行おうとしたものをみんなで取り掛かったのですが…。一寸間かず、ばあちゃんもついてきました。5分もしない内に汗が滝のように流れ喉が渇きます。もう少しと思いながら水分補給。休憩して作業開始。ギラギラと照りつける日差しに疲労は増し集中力は欠いてしまいます。しかし、義母だけは腰をかがめたまま、草を刈っていました。孫2人が「ばあちゃんが一番根性がある！」と笑っています。しかし、笑いごとではありません。この「もう少し…」の根性が、熱中症を招きます。実家の母もまたそうであったように、嫁にきてから田んぼの草取りは女の仕事でした。このつらい作業を何十年も続けてきた義母達は、昭和10年代生まれの肝っ玉母ちゃんです。9時過ぎに家に帰りついた私は、頭痛とクラクラ状態。OS1を飲み干し、ぐったりでした。今だ、2人の母の足元にも及びません。